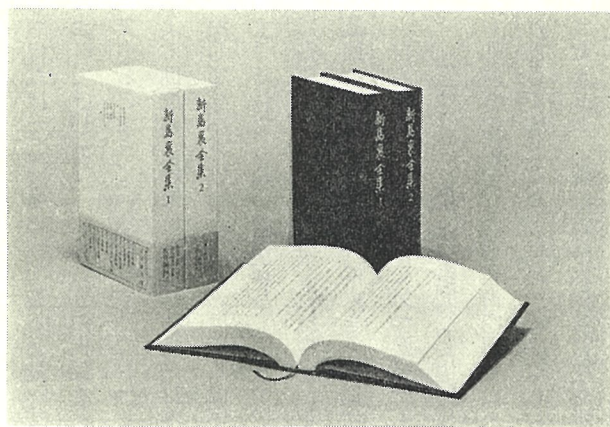


『新島襄全集』を語る



—出席者— (ABC順)

オーテス・ケーリ

(大学文学部教授)

河野 仁昭 (社史資料室室長)

島尾 永康 (大学工学部教授)

杉井 六郎 (大学人文科学研究所教授)

高橋 虔 (大学神学部名誉教授)

—司会—

北垣 宗治 (大学文学部教授)

北垣 本日は忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。

ご承知のように『新島襄全集』第一巻が二月に、そして第二巻が六月の末に出ました。順調に軌道に乗って進んでいるように思いますので、ぜひこの機会に、私たちがやってきたこと、いまやっていること、それから将来どういふふうになるか。またこの期間に新島襄に関する発見、オブザヴェイション、いろいろあることと思います。新島襄先生はいくら宣伝してもいい方だと思っておりますので、今日はひとつざっくりばらんにお話したいだけたらと思っております。

最近出ました第二巻『宗教編』を担当して頂きました高橋先生、最初の口火を切っていただけませんか。

『宗教編』

高橋 新島先生はご承知のように同志社創立者として、教育家ということでございますが、その文筆活動はご存じのように、書簡の人、といわれて、どっちかといえば書簡が中心になっていきます。そういう意味においては『新島全集』も書簡とか日記などが中心にな

っているのは当然のことと思いますが、しかももう一つの先生の面は説教者というか牧師というような面があつて、第二巻はそういう面の関連文献を収録したものであります。私も『新島研究』の雑誌を昭和二十九年から読んでおりますが、そのあいだにも森中さんが五十いくつかの説教をあそこに収録しております。それでいくらか知っておるつもりであります。こんどは編年的に編集されておりますから、そういう意味で全体を見渡すことができて、たいへん私もういろいろ教えられるところがあつて喜んでおる次第です。また印刷その他の面においてもどうかと思っておりますけれども、まあ期待以上というところと自画自賛になるかもしれませんが、これは編集の先生方のご功績であると思います。

そして、二、先生の説教のことについて申し上げますと、解題にもちよつと書きましたように、説教というものは実際は聞かなければ、読むだけではその値打ちは半減すると私は思っております。たとえば新島先生は説教のなかで涙を流されたというのをよくいわれますが、俗にいえばお涙ちょうだいというわけでしょうけれども、新島先生が説教の

どこで涙を流されたかというようなことはわかりませんからちよつと書くわけにはいきませんし、そういう意味においては先生の感情というか情熱というものは、印刷体ではわかりにくいと思っております。しかし、そうかといって先生はいつも感情的な説教をしておられるかというと、そうじゃない。やはり道理とか学問という点をなかに非常に強調しておられまして、そして説教の構造も論理的で、よく構成がまとまっています。これはやはりアンドーヴァー神学校で説教の講義を聴かれたわけですから、説教の組立てとかデリヴァリーとか、声の使い方というようなことまでもお習いになったと私は思っております。そういう意味では神学校の教育をよく再現しておられるのではないかと思います。

それからもう一つの点は、説教のなかに案外歴史的な例話が多くて、歴史的に回顧するという点がわりあい多いと思いました。

ですから単に感情に訴えるということではなしに、やはりそこに理論があり、論理があり、そして歴史的の事実が裏づけされていく。そういう点は今日でもわれわれの学ぶべき点があるのではなからうかと思えます。



高橋 虔氏

今日聖書の注釈とかそういう面からいいますと、それはどうしたって先生の時代にはまだまだ、言葉は悪いですけども幼稚な点もあり、不十分な点もありました。これは当然なことだと思います。しかし説教の要点であるところの、ご本人の誠実さの感情がよくあらわれている。しかもそこに理論整然たるところがあり、また歴史的の裏づけがある。あるいはイラストレーションといいますが、例話などは古今東西のいろいろの例を引いておられまして、今日私が読んでも、私などは漢学の知識が乏しいですから、漢文の引用などについては十分にいまもわかっておりません。これからまた、それをもう少し解きほぐして、何かの機会にはそういう例話の解説などもしてみたいものだと思っておる次第でござ

います。

北垣 ありがとうございました。第二巻は出たてのはやほやですので、いちばん印象の新しいところでお話しいただいたわけです。第一巻が出てすでに半年になりますが、河野さん、第一巻『教育編』を担当なさって、そのご感想をお願いいたします。

『教育編』

河野 同志社は教育機関ですからむしろ当然のことだろうと思うのですが、編集してみても、新島先生の遺稿のなかで私たちがいちばんよく知っていたものは、『教育編』のなかの同志社設立関係のものだと思ったのです。そのなかでも特に、これは草稿ではありませんけれども、『同志社大学設立の旨意』とか『同志社設立の始末』なんかは毎年、入学式とか創立記念式なんかに朗読もされるし、学生向けの『同志社大学の案内』その他のパンフレットのなかにも入っておりますからよく読んできた。『同志社記事』などを除きますと、大体その二篇に新島の考えは集約されているといつてよいでしょう。さらに数年前の『同

志社百年史』に収められているものがかなりあるわけですね。

ところが『教育編』のなかでも、演説・論説の項目に入れました史料類、はこれまでほとんど知らなかった。これらの草稿にみられる新島の知識や学問をどう受けとめればよいのか、私にはまったく学がないものですから何とも言いようがないのですが、島尾先生が『同志社談叢』の創刊号に、「新島襄と自然科学」というのを書いておられまして、これが私にとっては唯一の、演説・論説についてのガイドブックになったわけですね。それで解説のなかにも、島尾先生の論文にこう書いてあるというふうに書くほかなかった。

これは島尾先生もその論文に書いておられましたけれども、キリスト教信仰と自然科学の未分化というか、あるいは信仰に基づく科学的な真実の究明というか、そういうところに特徴があるなど思われる草稿があることに気がつくまじです。

北垣 島尾先生、それについてつけ加えていただくことがございますか。とくに地質学がキリスト教との関連で、いかに十九世紀の学問として、自然科学としてだいいじであつた

かという観点から。

新島と自然科学

島尾

新島と自然科学とのかかわりを、ちよつと「同志社談叢」に書かせてもらったのです。世間では新島は自然科学を勉強したのにどうしてキリスト教へ行ったのだろうというふうなことを書いている人がおりますが、私はそれは、やはりまちがった考え方じゃないかと思うので、そのことを書いたのです。つまり、新島が自然科学を勉強したのは、幕府の国防政策として、海軍の学校で軍事科学としての航海数学をやった。そこでつけた数学の学力が物を言つてアメリカでの留学が無事にいくわけですが、そのアメリカではちよつと宗教と科学とが分かれる最後の時



島尾永康氏

期ぐらいに新島が留学していますね。非常におもしろい時期に行っているのです。自然科学でいいますと地質学がその当時のアメリカの代表的なサイエンスで、しかもその地質学というのは、始めは聖書と矛盾してはならないという考え方でやっておったわけですね。とくにアームスト大学はかなり保守的な大学だったらしくて、そういう地質学によって代表される自然科学と宗教とは一つであった。またヒッチコックに見られるように、反ダーウィニズムの立場でもあった。むしろ、アンダーヴァーへ行つてからダーウィニズムを認める見方をするようになったのではないかと思うのです。

北垣 ありがとうございます。現在全集は進行中でございまして、ケーリ先生は英文書簡編と日記・紀行編を進めておられます。

島尾先生に和文の日記・紀行編のことを、現在ガラ刷りをごろんになりながらの状況で何かご観察なりをお願いいたします。

『和文日記・紀行編』

島尾 私が読んでいる日記・紀行編は、新島の一九歳のときの初めての航海の二週間分の

日記に始まり、二一歳から二二歳にかけて、江戸から函館をへてボストンにいたる密出国の一年半の日記、六年において二八歳のとき岩倉使節団について欧米を回ったときの二か月の日記、さらに六年において三五歳から一年半の日記、また約三年において三九歳から四七歳で亡くなるまでの九年間の日記から成っております。あこがれの米国での留学生活の日記と、同志社創立あたりの日記がありませんが、新島の一生を左右した劇的な脱国の状況と、壮年期の活躍はすべてカバーしており、壮年期の日記は多忙なせいもあって記述は詳しいものではありませんが、新島が取組んだ大きい問題は全部表われておりますので、これらの日記で新島の生涯をたどることができます。すなわち、外人教師雇入れに関して当局との折衝、医学校、看護婦学校、仙台学校設立の事情、ことに大きいのは私学の存亡にかかわる徴兵令の特典の問題と大学設立の募金運動です。また旅行の記述が圧倒的に多く、足跡は北海道、宮城、山形、福島、栃木、群馬、石川、福井、岡山、福岡、熊本、愛媛に及び日記即紀行になっています。

北垣 それでは同じく初校が出ております



オーテス・ケーリ氏

ので、英文のほうの書簡でケーリ先生、ひとつお願いします。

『英文書簡編』

ケーリ 英文書簡は第六巻になる予定でありますけれど、いまのところちょうど三〇〇通ぐらい、存在しているわけです。そのほかに下書きも三、四〇通ありますが、そのうち一〇通ぐらいがだいたい最後まで読み取れるので、アペンディックスにもついでにこうか、備考式に流したものと考えているところですから、しかしこの三〇〇通でほんとに大きく困った点がひとつ出てきているわけなんです。

というのは、ハーディーの息子のA・S・ハーディーがまとめた『ライフ・アンド・レ

ターズ』、これは第十巻として北垣先生の翻訳が進行中ですけれど、その『ライフ・アンド・レターズ』にハーディー夫妻に新島があてた手紙をフルに使っているのですね、題にあらわれているように。それは全文が出る場合もあれば適当にピックアップして、ワン・パラグラフとかスリー・パラグラフとか、あるいは途中に省略の点々が入っているような場合もあるのです。約一五〇通でちょうど半分ぐらいですが、それ以上の数の手紙をハーディー夫妻に新島が書いたことは間違いないんです。みかん箱一つぐらいでまにあわないと思うのですけれど、私も同志社に三〇年以上前に来てまもないうちに、興味をもっていじりはじめたわけですけれど、結局あっちこっちついてもそのオリジナルが出てこないんです。

たとえば、アームストのシーリー総長に書いた手紙はアームストにありますので、これはオリジナルを写すことができるわけです。それからアンドーヴァーで非常にごやっかいになったミス・ヒドンあての手紙が四十何通あるわけなんです。これもアンドーヴァー・ニュートン神学校のライブラリーに保存され

ているもので、オリジナルです。それからアメリカン・ボードあての手紙は、アメリカン・ボード文書の一部としてハーヴァード大学のホートン・ライブラリーに収めてある。そのなかに二十数通あるし、どういう流れかわからないけれど二〇通ばかり、アメリカン・ボードにあてたオリジナルの手紙が同志社に保存されています。こういうようなかたまりがあちこちにあるわけですけれど、いちばん大きいのはハーディー夫妻あてのものでありまして、これのオリジナルがどうしても出てこない。

ハーディーは『ライフ・アンド・レターズ』ということだったので、手紙を大体の背骨にして、あいだをいろいろ埋めたり解説したりしてくれていて、非常に役に立つ本なんですけれど、スペルや文法は、一〇年近くもアメリカにいたあいだに磨かれていくわけですが、しかしやはりそういう誤りがあるので、ハーディーが使った手紙ではほとんど直っているんです。だから半数近くは直っているもので、その他は新島が書いたままのもので、それをどう両立させるのか。ハーディーだけを流して、それから次にオリジナルを流すと



杉井六郎氏

いう考え方も成り立つのですけれど、やはりそれでは問題ですから、ちゃんとクロノロジカルに織り込んでいかなければならない。あまりでこぼかがあると思うのですが、そのへん非常に悩まされているんです。

結局、ハーディーに倣ってスペルは直すということを出発しました。しかし新島はなかなかおもしろくいろんなものを写すわけなので、固有名詞を新島のままに出したらどうかということ、とくにブレイス・ネームと人の名前は、そのままということで踏み出しているわけですけど、そのへんもだいたい離れてしまったようなものも出てくるので、どんなにしたものかなと、校正の段階でいろいろ悩まされております。

しかし手紙のほうはこれで三〇〇通、もち

ろん新島が書いたもののみですが、またそのおかげで新島にきた手紙も同志社に相当残っておりまして、そのへんは全集の第九巻来簡編の問題になるかと思うのですが、だいたい大ざっぱに見ますと、また大きく悩みを打ち明けると、そんなようなことになるかと思うのです。

私のしょつ中見る夢は、第六巻の英文の手紙がとうとう出版されたあくる日に、ハーディー夫妻あての何百通というもののオリジナルがアメリカのどこかの屋根裏から出てくるのじゃなからうか(笑)。これはいろいろ捜したんです。アメリカの国会図書館のサーチ・サービスがあるので、そこにも二回ぐらいかけてもらいましたし、「ニューヨーク・タイムズ」のブック・レビュー・セクションのところにそういう欄がありますので、そこにも出しましたが、音さがなくこれは出版の後日を期待するよりしかたがないのじゃないかという気がします。

北垣 それが出てくるように祈ればいいのか、出てこないように祈ればいいのか、むづかしいところであります(笑)。

それでは杉井先生、和文書簡の進行状況そ

の他に関してお願いたします。

『書簡編』

杉井 進行状況はまだ出版社に送り込むような段階までになっておりません。最終的に番号をつけて整理をしようというところですよ。ご承知のように書簡については森中さんの『新島先生書簡集』という膨大な書物と、それから『続書簡集』というのがあるわけですが、現在では、新しく三百何通ぐらいが追加されることになるだろうと思います。ごく最近に、追加されることになったものでは、河野さんの努力で小矢野さん所蔵の書簡が集まってきたり、この七月初めの東京の七夕市で、やはりはきが一通出ていたりというようなことで、こういう作業を進めておりますと、ぼつぼつ持っているという方がございまして、さらにいま手に入れたと思うっておりますのは、東京の松沢資料館、それは賀川豊彦の史料の収まっている所ですが、そこにも募金関係の書簡があるということがわかりましたので、これも連絡をして何とか収録しよう。ですから方法としては、原稿をつくってしまうと当然番号をつけることになります



河野仁昭氏

ので、番号を打っていかねければなりません
が、その番号を補遺ではなくて、あるところ
の段階までで切るわけですから、ざりざり
りまで渉猟は続けようという作業が一つある
だろうと思うのです。

書簡について一般的に申し述べられること
は、私は二点あるだろうと思うのです。一つ
は森中さんの収録の方法は、これもごらんにな
った方はよく承知なさっているわけですが、
けれども、新島の言葉のなかで、たとえば小
崎、宮川、海老名、横井というような、いわ
ば新島を助けることになった人々について非
常に厳しい言葉で非難をなさっているところ
があります。そういうところが従来の『新島
先生書簡集』は「……」で省略をしたわけ
です。それは非常に深い同志社としての考慮も

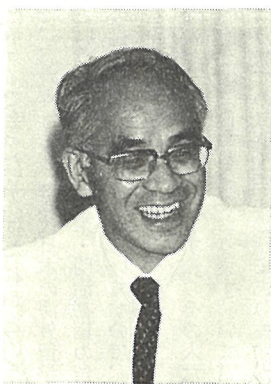
はたらき、また新島先生というイメージを壊
すまいというような配慮もあっただろうと思
います。しかしこんどの書簡編は、そういう
部分を原文のまま全文を載せようということ
が何らの抵抗もなくいうか、抵抗といった
ら大げさですけれども、編集委員会において
それが認められて、多くの方から、それはあ
たりまえだということになったのは、これは
非常に大きい、新島に迫る作業の一つだとい
うふうに思っております。

それから第二に書簡について思うことは、
いまのに関連するのですけれども、いまの世
の中の人には岩波文庫で出ている『新島襄書
簡集』がいちばんじつは手ごろです。ところ
がご承知のようにこれも絶版になっているわ
けです。この岩波文庫版の特色というのは二
つありまして、一つは非常に読みやすくして
あるということです。漢文調の表記は全部改
めておりますし、いまの学生でも、少しまだ
むづかしいという人はおりますけれども、し
かし読みやすくしてあるわけです。それから
もう一つの特徴は、省略部分がそのまま理由
もつけずにくっついちゃっているということ
がございます。この二つの点が、現在新島書

簡というものに接するときの、一つは非常に
流布しやすい点であり、一つは困った点なん
です。

したがってこんどの書簡集は、もちろんこ
れも編集委員会、いわゆる読みやすくする
ということがやはり一つのコードになったわ
けですけれども、そのときの最低の条件は書
きかえないことでした。たとえば清濁、ある
いはかたかな・ひらがなの混用は書きかえな
い。したがって漢文調にあたるところを現在
の口語文に近い形で改めないというかぎり
においては、古体を残そうとする方法をとっ
ているわけです。ただ読みやすさのために唯
一やっていることは、これは学生にはまだ足
りないという点があるかもしれませんが、れ
ども、新字体に改められるものは新字体に改め
るという漢字の問題、それから合字^{ごうじ}あるいは
変体字の表記については通行の文字に改め
る。さらに句読点は打つというような、ふつ
う史料学でいわれる原則にあたるものは採用
しよう。

そういう点で、いま書簡集を少し離れて、
第一巻、第二巻をつぶさに校正刷りから読ん
でみますと、ではこれがほんとに読みやすい



北垣宗治氏

かといったら、私はけっして読みやすいとは思いません。これはやはり読解の便なんという形のものではなくて、相当のところまで時代背景ならびに前後の経緯など把握してもじつはなかなかむづかしいというふうには思います。その点では書簡はある意味では完結性がありますから、読解の便というのは、現在の段階でもまだ新島に迫るひとつの易さというものはあるだろう、そんなふうに思っておりますが。

北垣 例の来簡編（第九巻）というののもそのうちに編集されるわけですが、英文の来簡編はどちらに入ることになりますか。

河野 まだ全然決まっております。

北垣 たとえばW・S・クラークから新島あての手紙というのは非常に興味深いもので

すから、そういったものを今回ぜひ採録すべきでしょうし、どっちに入るか、やはりペーシの関係によるでしょうか。

河野 やはり「来簡編」に収められることになるだろうと思いますね。委員会でご相談いただいて、どれを載せるかはケリー先生に選んでいただくことになるでしょうね。

『新島襄の生涯と手紙』

北垣 私は第十巻の『新島襄の生涯と手紙』というところで、いま毎日少しずつ訳しているところです。夏休みじゅうかかって何とか全部訳し終えられたらと思っております。

先ほど杉井先生が、和文の書簡編は今回きちんとしたものが出るが、けっして読みやすいものではないんだということを強調なさいましたが、第十巻は翻訳ですので、どれだけ読みやすくしてもいいと思ひまして、これこそ読者にサービスすべき絶好の場所じゃないかという気がしております（笑）。注釈もできるだけつけてみたいと思つて少しずつ調べている最中です。

ただA・S・ハーディーの書物は重要な史料でありながら、新島が死んで一年目に出た

ということもありまして、間違いもたくさんあるように思つたのです。ハーディーがアメリカ人であるがゆえに、日本語あるいは日本の環境がよくわからなかったということからくる間違いがいろいろとございます。第一ペーシからしていくつかの間違いがあつて、それが新島伝の作者たちをみんなつまづかせてきたというようなこともあるわけでして、今回忠実な翻訳にしたいと思ひますけれども、事実をハーディーがまちがっているかぎり、そのページにフットノートで訂正し、それ以外の訳注は全部後ろへ回すというやり方をしてみたいと思つております。

新島はアメリカに在学中にかなり多くの日本人に出会っております。たとえば、モンソン・アカデミーの場合がよい例です。その名前が特定できるかどうかの問題があります。たまたまきのう訳していた個所で、ニューヨーク州のトロイという所に一八七一年の夏に旅行で行くわけです。そこで三人の日本人に会った。そして非常に愉快に話をした。その連中はクリスチャンになつてないけれども、聖書は神の言葉であるとして尊敬しているというふうなことを書いています。

はトロイで会った三人はだれかということ
で、石附実さんの『近代日本の海外留学史』
という本の付録に、幕末・明治初期の留學生
の長い長いリストが載っていますので、それ
を全部調べてみましたら、やはりトロイにい
た人が三人出てくるんですね。その人たちは
明治三年に日本を出ております。いま言っ
ておりますのは明治四年の話でありますから、
ほぼそこに出てくる人に新島が会ったにちが
いないと思うのですが、そういった人々が帰
朝後いろいろ活躍した人であることがわかっ
ているのに、新島との関係はほとんど何もな
いという気がするんですね。

ですから留学中に会った人というのは、
出会ったからといって、そのことがどれだけ
その後意味をもつかということになると、あ
まり意味をもたない場合が多いのではないか
という気がして、そのへんは非常に不可解な
感じもするわけです。

それからもう一つ、あのリストを見ていて
いかに多くの人々がそのうちに姿を消してい
ったか。また若死するというのもあります
ね。ラトガーズに行った多くの人が若く死
にますが、どうなったかわからないという人が

いかに多いかということも感じますね。そん
なことを感じながら、いま翻訳を進めている
次第です。

ただ、それぞれの巻が六〇〇ページから六
八〇ページぐらいになっておりますので、は
たして『ライフ・アンド・レターズ』の翻訳
がここまでの大きさになるかどうか。あれだ
けが薄い三〇〇ページぐらいのものになって
さびしく出るのじゃないかなという気がして
いますので、そうなると三〇〇枚の解説を書
くのかなんてことで(笑)。

河野 和文の日記が五五〇ページぐらいに
なるのじゃないかと思えます。和文書簡は二
冊に分けますから、五〇〇ページ以下になる
かもしれないですね。

北垣 今回、全集にもとづいて新島襄の詳
年譜をつくり直す計画が進んでいますね。そ
の話をしていただけませんか。

河野 英文のほうはケリー先生にお願いし
てぼつぼつやろうかという態勢に入っている
ところですけれども、和文のほうは原史料か
らカードに一項目一枚ずつとるという作業が
ほぼ終わっています。最終的には委員の先生
方に、この項目は年譜に載せよう、これは削

除しようということの判断をしていただかん
といかんことが一つと、史料によって記述内
容や日付に違いがあるやうな問題があるので、そ
れをどうするかというような問題があるだろ
うと思っています。今のところどれぐらいの
項目になるかわからないのですが、あまり詳
細なものだと、第八巻「補遺・雑纂編」に収
めきれないかもしれません、他の史料もあり
ますので。

ケリー先生のほうでは、すでに英文の日
記・紀行の作業を進めておられますが。

『英文日記・紀行編』

ケリー 第七巻が手紙以外の英文日記・紀
行編ということになっておりますが、これは
英語での言い方でもちょっと困っているぐら
いなんですけれど、ダイアリーというよりも
ジャーナルといったほうが向くようなものが
ありますし、ジャーナルときたらあまりにも
自分向け一本で、日本式にいうとノートとい
うような、そういうものもあります。だから
どう数えたらいいのかとまどうわけですが、
六冊ばかりそういう日記、ジャーナル、ノー
トラしきものがあるんです。

新島先生もなかなか器用なところがありまして、単語に独特の速記を使うんです。六十几つばかり、しょつ中出てくる単語——*from*をはじめとか *and* とかの *do* 動詞、もういろんなものがあるわけで、だいたい読み取れているのですけれども、ときどき化け物が出てきましたね。全然いままで使ってなかった、また後ほどでも使わないというようなのが出てきたりしているのですけれど、『ライフ・アンド・レターズ』にどうも日記らしいものが出てくる。その日記はいま同志社に存在していないものです。ところでつい一、二年前でしたか、新島得夫さんから、いま私が言ったノートの一冊を収めて頂きましたね。これがなかなか穴を埋めてくれたわけですね。

一方、外遊の場合、特に二度目の外遊のときははっきり三冊がありますし、それから最初の留学の一〇年、ヨーロッパ行きのところもちゃんとありますが、むこうにいたときは新島は英語で書くわけで、それが日本でつけているものどこまでうまくドッキングしているのかということは、私ちょっとまだそこまで手をつけておりません。あるいはいきな

り、英語のなかに二日分ぐらい、筆で日本語でババババンと出てきて、それを英語の七巻のほうに入れるのか、そいつだけはどこかにお譲りするのかわという問題があります。それ以外にいろんな英文のレポートがあるので。

二度目の外遊のときは健康もすぐれず、四、五年の冬にクリフトン・スプリングスという所にふた月半ばかり療養に行くわけです。そこで、あるいはその直前に大奮発して、日本にキリスト教の大学を建てなければならぬというのと、それから日本をどう伝道したらいいのかという、手書きの三〇ページに近い論文があるわけです。これは今でもアメリカン・ボード文書に収まっているのですが、それを、ハーディーが『ライフ・アンド・レターズ』に利用しています。だいたい編集した上で。そのオリジナルは私が見たときはハーヴァードになくて、たまたま、ボストンのアメリカン・ボードで何年か前に見つけて、コピーをとらせてもらったことがありました。それをこんどハーディーのものとして照らし合わせて朱を入れてみると、スペルのまちがい等は別として、それこそどの頁もま

っかになってしまふんです、前後をかえたりいろんなことで。またハーディーはいくらかとばしているところもあるんです。新島もボードのほうで編集してくださってけっこうだと言ったにちがいないわけですし、そちらのほうでいくらか磨いたりして、当時アーモストの総長になっていたシーリーさんとか、あるいはウイリアムズ大学の総長とか、そういう人にエンドースしてもらって、アメリカで、アメリカン・ボードや組合教会関係で流したりしているわけです。それはそれでけっこうなんですけれど、新島全集ときたら、やはりもとに近いもので、できるだけコンプリートなものを流すべきか、あるいは整理されていくらか磨かれたほうを出すべきか、そっちは『ライフ・アンド・レターズ』に載っているんだから、あるいは印刷されたものがアメリカン・ボードのほうの史料のなかにあるんだから、この際やはり、いちばん筆に近かったものを流すべきか、このへん迷っています。そのほかいくつかこういうものがあるんです。

もう一つ大きいものは『マイ・ヤング・ダイズ』で、このほうは、新島が、マテユア

ーになってからの、四十二歳のときに書いたものですね。ミセス・ハーディーのために書いたのではなかったですかね。

北垣 第二次外遊のときメイン州のバー・ハーバーで完成したのだと思います。

ケーリ だからやはりいちばんマテューアなときの英語だと思います。そういうのももちろん七巻のほうに入るわけです。

またその他「雑」がいくらかありますが、一、二ページ式のものあれば、レポートあるいはノート式なものもあるので、とにかくいちばん困るのが自分向けにしか書いてないものですね。それから金銭出納簿ですね。ドル・セント簿と言ったほうがいいのかしらないけれど、こういうものでちょっと誤算もあったりしながら参考になるものがあるんです、どの程度それを載せるべきか。

たとえば日本にこれから向かうのだという一八七四年のときのちゃんとしたジャーナルがあるのですけれど、そのいちばん後ろのほうに、日々使った金がずっと記してあるの、そういうものからは当時のことがわかります。船に乗ると毎日、前の二十四時間にどれだけ走ったかという揭示が出るんです。そ

れを新島は一生懸命写しています。ヨーロッパへ行くときも、日本に帰るときも。当時はまだスクリー以前時代の代だと思います。横に輪がついているあいう船だったかと思うのですが、場合によっていい風があると帆をはって燃料を経済しようかというような走り方もしたわけで、そういうことも含めて考えると、飛行機のいまの時代にまた別の意味と事実が出てくるのじゃないかと思ったりも致します。これは、ジャングルとは言いませんけれど、ブランブルぐらいで、ときにははれものにさわるような気もしないわけじゃない。——というようなことで毎日泣いてます(笑)。

北垣 いまのは第七巻に関してのお話でありました。第八巻は補遺・雑纂編ですが、河野さんそのへんのところをどうぞ。

『補遺・雑纂編』

河野 これはまだ、どういう史料を載せるかということについて委員の先生方にもご相談申し上げてないことです。年譜はとにかくそこへ入れなければいけないだろうということと、さっき杉井先生から、いまもぼつ

ぼつ書簡がでてきているというお話がありました。一年に四、五通出てきているのです。それから第二巻の「宗教編」に関連した史料で収録していないものとか、要するに補遺ですが、その役割りをもたさなければいけないだろうということがありますね。

それから新島先生のお葬式の記録。その中でも、たとえば葬式の模様とか、新島先生が持っておった本を形見分けとして人々にあげたリストがあるんですよ、読みづらいですけども。それを旧邸所蔵目録といっしょにすれば、ほぼ完全に新島の蔵書がわかるわけです。だからこれはやはり載せたいなというふうに思っているわけです。それから新島に関する伝記とか研究論文のリスト。

杉井 そのほかに、当初の委員会のなかで、雑纂編のなかに収録をしようというて提案していたのは学習ノートですね。それからノートばかりじゃなくて、ある書物のなかにどんな書き込みが出てくるのかというようなことも収録をしようという提案はしてあるわけです。ただ作業としてそれをどんなふうに行うことができるかという問題はあるわけです。しかし筆写したものであっても、学習ノートにあた

る部分は高橋先生にござんいたいて、アン・ドゥヴァー時代の神学の講義ノートというのはどんなふうなものが収録できるのか。それから島尾先生には、軍艦操練所時代のものについてどういふものを収録できるのかということをも、もう一回やはり検討していただかなければいかんと思っておりますが。

河野 それから新島家に関するものですね。

いまケーリー先生がちょっと触れましたが、新島は日記としてノートを使い始めるわけですが、後ろのほうにずいぶん空白のページがあるのですから、その空いたところに英文や日本文でメモをちよくちよく書くわけですね。それが本文と対応する内容ならば本文と一緒に収録したほうがよい。ケーリー先生が困っておられるのは、本文とまったく関係ないものがあることで、あるいはなにを書いているかわからない計算メモなどがあることで、場合によってはそれらのメモのあるものは雑纂へ入れないといけないかも知れません。いずれにしても第八巻「補遺・雑纂編」の内容は、今後の委員会での検討いかんによって変わってまいります。

杉井 この文献というものを、一部はここに載せ、一部はあちに載せるという形はとらざるをえないこともあるかもしれませんけれども、後世は非常に困るのですよね、そういうことをして分けることは。やはり、この史料はこういう史料であったということを重ねなければ大変なことになってしまふ。

全部収録することもできないということが、あらかじめはっきりしていたらそれはまた別なんですけれども。

北垣 杉井先生、第九巻の来簡編に関してもちよっとお触れいたいては。

『来簡編』

杉井 来簡は、じつは私はまだまったく手をつけておりません。事務局のほうでだんだん整理をしていただいております、だいぶ選択をする必要があるということは事務局のほうからもちよつは出ております。ただ、この全集から離れた言い方になるわけですから、従来の全集企画のなかでは来簡を収めるという例はほとんどありません。そういう点で新島全集に来簡を収録するということ、は、自画自賛的ですが、画期的だとい

うふうに言っていると思うのです。ただ来簡が人も裾野が広く、時期的にも長期的にわたってあるかといえますと、どうもそうではない。来簡を通じて新島のほんとうの息吹きのようなものを感じ取るというのは、例としては数はそんなに多くはないというふうには思っています、心配しております。

河野 おっしゃる通りだと思いますね。新島を語るというよりは、むしろ新島にあてた人の考えを語っているものでね。ですからよこした人、たとえば勝海舟のことを調べたいと思う人には興味があろうと思えますけれども、新島を調べたいという側からはどうでしょうかね。

杉井 新島の書簡を一通も散逸させまいとしたいのは徳富蘇峰だろうと思うのですけれども、その徳富蘇峰の新島あての書簡はどれほどのものがあるかという点、新島のほうにはあまり残っていないです。ただそのなかには、大学設立に関して同志社という名前を決定するについて非常に大きなことを提案していたり、そういうことはあるわけで、来簡類から新島が受けた問題というものはいくつか指摘することはできるだろうとは思

ます。

北垣 来簡編には来簡編としての大きな意味があるでしょうから、ぜひ成功させていただきたいですね。来簡は一〇〇〇通もあるそうです。当時の田中不二麿、木戸孝允、井上馨、富田鉄之助、北垣国道、こういった人々からの手紙は新島と関係がなくても活字にする価値のあるものにちがいないと思いますし、そこへもってきて英語のほうはW・S・クラークですからね。

河野 おそらく英文も和文も、新島の書簡と内容的に対応するものが、数は多くないにしてもやはりあるでしょうね。

杉井 だから来簡編ではやはり書簡編が出てますから、アスタリスクをつけて、何巻の何々とは対応できるというような、これも前に編集委員会で申し上げていたことですけれども、それはできるだろうと思います。

高橋 英文の来簡でハーディーからの手紙とかいいうものはそろっているのでしょうか。ケーリー 相当あります。ただ、ハーディーのはどれぐらいあるか、ちょっと自信がないのですけど、いくらかあります。

北垣 これで第一巻、第二巻から将来出る

ものに至るまで、大体の全貌をご紹介頂けたんじゃないかと思っておりますが、たまたま今回出ました第二巻の写真のなかに、例の有名な明治十六年の大親睦会の写真が載っております、そしてほとんどの人を、これはだれだということを書いていただいておりますね。これは後世の者には非常にありがたいことだと思うのですが、どうやってお調べになったのですか。

杉井 これは警醒社から当時出されたものによりました。

ケーリー 一人だけわからないのでしょうか。

杉井 はい。編集員が。

河野 A・S・ハーディーの編著である『ライフ・アンド・レターズ』を、どうして全集に入れるのですか、という質問を受けたことがあります。

北垣 その答えは、この本は編著書ですが、けれども、新島がハーディー夫妻とかフリント夫妻その他にあてて書いたものを非常にたくさん含んでおりますので、それを日本語に訳出することは新島をして新島を語らしめることになり、たいへん意味があることだと私は理解しています。

全集の準備期

それでは一巡したように思いますので、ここでちょっと観点を歴史的なところへ変えまして、この『新島襄全集』が同志社においてずっと以前から企画されておりましたのに、出るのはいくつとことしになってからですが、ちょっと昔を振り返りまして——と申しますのはこの私たちの委員会は、昭和五十五年十月二十八日に上野総長から改めて任命を受けた委員会でございますが、それまでに三期にわたって委員会があったらしくて、ご出席のケーリー先生は、その三期とも委員をお務めになったようです。そのへん、昔を振り返ってお話しいただけますとありがたいと思うんです。

ケーリー 最初の振り出しは大塚総長の時代でしたね。それで森中さんが呼ばれたのじゃないですか。そして大塚さんからこんど住谷総長にバトンが渡ったわけですけれど、その辺でどこにも到着しないような委員会を数回やったおぼえがあります。それでこんどは同志社九十年史をがんばろうということを押した始めたのが秦孝治郎理事長なんです。新島全

集はなにか空気が抜けてしまった感じでした。推進役の秦さんも忙しく、それも自分で背負ってできるような仕事じゃないですから、なんだか宙に浮いたようなかつこうのところ、一九六五年に田中さんが不幸にもこの世を早く去ってしまった。それで本部庶務部長になった生島さんが、先ず新島資料をきちっとしようじゃないかということで遺品庫の目録つくりにとりかかることになり、委員がクラーク館の一室に集って仕事を始めました。そのようにして遺品庫目録のものになるものができたのじゃないですかね。

杉井 それは七七年でしょう。

ケリー それの準備のためにぼくらは二、三年かけていろいろやったですね。そのの続きもあるでしょう。その辺からこんどは河野さんがほんとうに舵をとってくれるようになってきたわけで、新島全集よりさきに百年史をまず出すようにがんばらなきゃ話にならないかという上野総長の強い要望で、百年史に先手を讓って、それがりっぱにでき上った。それからこんどの場合で、だから全集委員会としては三回不発という話もあるけれど、私は二回半ぐらいでいいのじゃないか(笑)。

野球はツウダンからでしょう。それでちょっと告白しますと、私もずつつきあっているわけだけれど、先ほども言ったように、結局ハーディーのが一つ出てくると、これはえらいことです。やっぱり出てくるのじゃなからうか、と思いつながら、ぼくはこれやりだしてから三十三年ですからね。最初アーモストに帰ったときからの仕事ですね。

杉井 もう出てこないのじゃないかな。

ケリー 私もそれを信じたいです。ですけれど、だからだと来た気持ちには、みんながほんとにやるのならぼくちもやるけれど、英語編だけ、まあレターズが主ですけれど、そればかりやるのはちょっと怖いなといううなことでした。もう夢はあまり見なくなっただすけどね(笑)。

河野 私は北垣先生とケリー先生が新島のオリジナルと『ライフ・アンド・レターズ』に載っているのを読み合わせをされて、どれだけA・S・ハーディーが直しているかということをやっていられたときに、これだけ手を入れていたら、私はかえってハーディーは残さなかったのじゃないかと思いました。残す意味がない。

ケリー ハーディーはあのころにはちょっとした小説家になっていたんですよ。ベストセラー式のものを書いたりしたことがあったりホートン・ミフリンというボストンの一流の出版社ですけれど、そこそ親しいものだから、新島のオリジナルをずつとなおしていつてそれで組ませていったんだと思うのです。その間のつながりとか、いろんな説明も要りますしね。父のアルフィアスは死んでいますので、お母さんのスーザンから全部史料を手に入れたんじゃないかと思うのです。ただ、全然使わなかった手紙もあったと思うんです。それはホートン・ミフリンに渡すはずはない。だからその束がどこにあるかもわからない。

杉井 いまのボストンの人はアルフィアス・ハーディーの直系じゃないのでしょうか。ケリー いや、直系は直系なんだけれど、後を継いだほうとはちがうんです。

北垣 私の知る限りではゲルストン・ハーディーはA・S・ハーディーの孫なんです。ハーディー家の系図はぜひ第八巻の補遺・雑纂編に入っていたらどうでしょう。新島家のみならずハーディー家も必要

ですよ。

杉井 いまのケリーさんのお話、私は大切なことだと思っております。新島全集をつくらうとすると、私も一回全集の委員になつて、やめた一人なんですが、やめた理由は、いま申しますとごく単純なことだったと思うのです。それはどんなものがあるのかという確定がないまま全集を出そうということだったのです。これじゃ絶対仕事はできませんと言った。そのほかに幾つかあるのですけれども、いちばん大きな問題は、どれだけあるのかということがわからない。その点でケリー先生にお気を悪くしないで聞いていただきたいのは、ケリー先生がお調べになつてくる英文のものがどれだけあるかということの展望も、結局あのときに委員会にはなかなかわからないわけですね。森中さんがどれだけ整理をなさっているかということも、あのとき全貌がわかりません。事実わかつているのは何かというと、遺品庫にあるものだけということです。ところが、遺品庫にはいったいどれだけあるかといったら、それもわからない。だからまずカタログをつくってくださいと言ったら、それはつくりましようといっ

て、ケリーさんは袋をつくっていただきました。カードもつくっていただきました。そして当初はクラーク館、あそこが移されてからいまのクローバーハウスの向こうの方のところ、あそこで週に二回ぐらいずつ文書を読んで整理していく。それがほんとうに実ったのは社史の力であつたと思いますけれども、一九七七年にまず目録の上が出たわけですね。そしてその作業が行なわれているあいだに百年史の仕事がかさなってくる。あの仕事はやめてくださいということを社史にお願いして……。

北垣 高橋先生はいつごろからお加わりいただいているのでしょうか。

高橋 はつきりしませんけれども、同志社九十年のパンフレットが出ましたね。あのなかに一項として新島全集の発行ということが出ています。ですから、あのときごろだと思っています。ですから、あのときごろだと思っています。少し説教があるから神学関係の者も入ってもらわんといかんというような話し合いがあつたらしいのです。その後の時代かと思っています。

北垣 さつき杉井先生がおっしゃいました点に同志社当局は非常に感銘をうけたらしく

て、生島さんが中心となって目録づくりを始めたのだと思います。私もしばらくお手伝いしたおぼえがあります。中嶋静恵さんをとくにお使いになつていましたね。

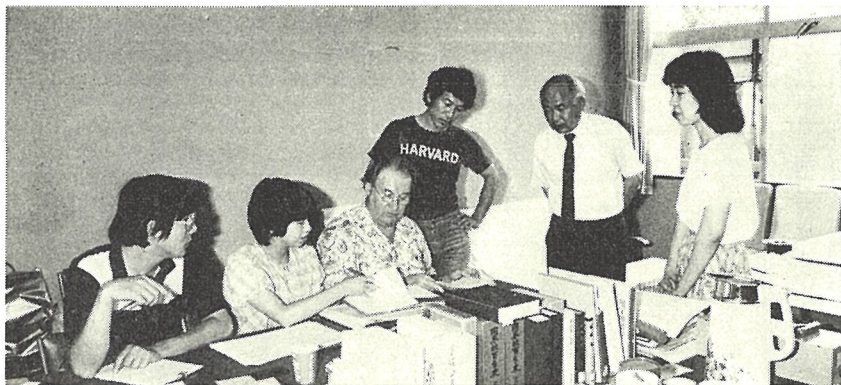
杉井 生島さんの後が大江直吉さんですか。

河野 そうです。生島先生が昭和四十三年ですか香里の校長で行かれて、その後が大江直吉さんですね。それから服部史郎さん。

さつき資料がどれくらいあるかわからないというお話で、たしかにそのとおりなんですけれども、目録ができてもおかつかみにくくて、現在の十巻の巻立てが編集委員会で一応きまりましたのは五十七年の三月十一日、委員会が発足して一年半ばかりたつてからなんです。主題別に分けたら、それぞれがどれだけの量になるのかわからない。だからこの委員会も最初は手探りの状態でしたよ。

杉井 それは最初の委員会に全十巻の構想のようなものを試案として出した。

河野 十巻になったかな——。でも、それはなんとか十巻にしていきたいということで、中身については検討がなかった。



「新島襄全集」編集委員会室（女子大学、心和館）

杉井 そのときの委員会で、実はさきほどお話ししたハーディーのものをなせ入れるかというところで島尾先生もおっしゃったと思いますけれども、やはり新島に入っていくために非常に重要なことだということで、ぜひ一巻入れたらいい、外国には全集のなかにそういう自叙伝というか、自叙伝に近いものを入れている例があるということをも島尾先生おっしゃられた。

河野 新島の全集の中に読み物としての性格をもったものを一冊加えたほうがいいというご意見があって、それで加えようということになったと記憶しています。

内容も新島のオリジナルで構成されているものであるし。

北垣 一九七一年ごろのことですが大塚前総長と住谷総長とケーリ先生の三人をトップの最高顧問にして全集を企画したことがありました。そのとき秦孝治理事長が、あの方はビジネスマンの意識が強いですから、なんとか早く出したい、なぜ出ないのだということとでいろいろ心配されまして、そんなに出ないのだったら、出せるものから出そうじゃないか、伝記を一巻にまとめて出したらいいか

いうことで、魚木忠一先生の『新島襄一人と思想』と、デイヴィス先生の『新島襄の生涯』それに徳富蘇峰による伝記を合本にして、それを一巻にします出そうじゃないかという計画になりました。私その委嘱状を一九七一年十一月にもらいましてあれを訳すようになったことを記憶しています。訳したのは一九七二年の夏でしたが、秦さんがその秋に亡くなられ、伝記の一巻はうやむやとなっていたのでしたが、結局校友会が百周年記念事業で出版してくださったのです。

河野 大江直吉さんがたまたまそのとき校友会の専務理事をやっていたね。ご自身为新島全集の委員会に関与しておられて、北垣先生がやられた翻訳が寝ていることを知っていたわけですよ。校友会としてもなにか文化的な事業をやりたいということから、同志社が全集を出すときそれを入れるならば、校友会としては当然版權は同志社のほうへお返しする、しかしそれまで使わしてほしいということで訳が日の目を見ることになったわけですね。

北垣 それでわざわざ全集委員会を開いて決めていただいたようなことを記憶しており

ます。全集が今回こうやって同朋舎から出るようになりましたが、やはり森中先生の貢献が絶大であると思います。実はつい二か月前の新島研究会で森中先生が新島旧邸に関するお話を熱をこめてなさいました。それを私聞きに行ったのですが、そのときに、いよいよよrippな新島全集が出つつあるという祝福の言葉をみんなの前でお述べになりまして、非常にうれしく拝聴しようなしいですが、森中先生はこれまで書簡集正続二巻を編まれ、そして詳年譜を出され、細かい点についてはいくらか不備もございましたけれど、やはり先駆者として仕事を十分にしてくられたことはだれも否定できないことだと思っております。けれども、森中先生のなさったおりのことを私たちがしているのはあまり意味がないわけですから、この委員会はやはり独自の立場で仕事を進めてきたようないです。

それと並んで強調しなければならぬことは、社史史料編集所に河野さんがおられて、河野さんのもとにrippな事務組織があり、それを私自身「河野マシーン」と呼んでいるのですが、それがフルに機能できる状況にあ

ったということが非常に大きかったとおります。たしかに、百年史の四巻を堂々とお出しになったということ、そしてその余勢を駆って新島全集を出すことが可能になったわけですし、同時に、河野さんとマシーンをずっと強力に支持してこられた上野総長のうしろ盾が大きかったと私は思っております。ですから、やはり時を得、人を得たということが今回は大いにあったのじゃないか——きようはみんな関係者ばかりですから、人を得たなんていうと自画自賛になりますけれども、やはり否定できないのじゃないでしょうか。

河野 だれがやるということではなくて、過去の編集委員会の体勢に欠けていたものは事務局だったと思うんですね。委員の先生方の手足になつて動いていくところの部分が欠落したままで、要するに頭ばかりあるような委員会だったのです。たまたま百年史をやった体勢があったものですから、この体勢で新島全集に取り組もうということになった。それまでの取り組み方に対する反省がそうせしめたと考えていいと思うんですね。

杉井 たしかに船頭が多かった(笑)。

医学部の構想

北垣 それではいま現に仕事を進めつつあるわけですが、新島襄という一人の教育家・宗教家、そして明治初期の改革者として日本を指導した人物であります。その人の書き残したものを日常的に点検なさいますと、どういふふうな新島のくせ、特質、イメージが出てきたか、あるいはどのような新しいかわった思想、人間的な面を見出されたか、そういったことに関してお話しただけなら、たいへん参考になるのじゃないかと思えます。

高橋 いまおっしゃったことからちょっと離れるかもしれませんが、先生は四十八年生きておられたけれども、もしももう十年生きておられたらどうなったかということをちょっと思いました。もう十年生きておられたら、同志社大学医学部ができておったのじゃないかと私はいま思っています。あの時代にはご承知のように同志社看護婦学校から始めようというって病院もできておったわけです。スタッフもできておったのですが、先生が亡くなったものですから、スタッフはみな失望して帰ってしまったというのが実情じゃ

ないのでしょか。そしてそれが佐伯さんのほうに移ってしまったということですね。それから中村貢先生のデントン伝を読むと、デントン先生も女学校卒業生をわざわざアメリカの看護婦学校に奨学金を出して二人送っておるんですね。名前もはっきり出ています。ですから、そういうふうに女子部と男子部のほうでもその方面のことをわりあい熱心にやりつつあったところに先生は亡くなった。そういう意味の大学完成というものを先生は考えておられたのじゃないかと思うんです。想像にはしるようなことを申し上げて恐縮ですが、そういうことも一つ感じました。

北垣 同志社大学の医学部はおっしゃるとおりだと思いますね。のみならず、仙台の東華学校だとか、あるいは新潟の北越学館とか、そういうキリスト教系の学校との関連ももっと深まったでしょうし、あるいは仙台には、同志社大学とは別の名前かもしれませんが、けれども、伝統を継ぐ学校がつづいていた可能性だってありますね。

河野 ただ、医学部だけに關していいですと、明治二十年前後というのは、医学校の設立認可というのはいへんむつかしかった時

代みたいですね。素人考えですが、それまでの漢方医学と西洋医学とがちょうど相拮抗するような状態になってきまして、一方立てれば一方立たずみたいなことがあって、それまでつくられている医学校の見直しを政府が命ずるというようなことがあったり、つぶれたり、なかなかむつかしい時代だったみたいですね。ですから、もう少し生きておられたら、おっしゃるようになっていたかもしれないけれども、同志社の看病婦学校ができたよりもさらに何年か後につぶれている医学校なんかも東京のほうにありますから、かなりむつかしい状況ではあったらうなと思います。

高橋 ただし、看病婦学校をつくられたという目的は、最後はやはり医学部という目標であったと思いますね。それにどまるということではなかったと私は思います。その第一歩という点を先生は考えておられたし、亡くなるときに、やはり心残りのことはそこであったかというようなことも想像しています。もう十年生きておられたならば、医学部はできなかったとしても、相当のところまで行っておつたと、想像話でたいへんすまんの

ですけれども。

杉井 私はたまたま教育編と宗教編をお手伝いしながら思ったことなんですけれども、教育のことに關していいますと、ずっと年次のに並べてみて、同志社はキリスト教という主張をいつしはじめるか、これはたいへん興味深く思いますね。キリスト教主義という言葉と使い分けるわけですが、内部的には、たとえば社員会の記録のなかではキリスト教主義によるということを早く決めるわけですが、けれども、しかし明治二十一年までは、キリスト教ということをいわゆる学校として、教育の理念としてなかなか前面に出さないですね。だから新島は深い注意のなかでこの私学校というものを始めようとする。「キリスト教」、「キリスト教主義」という言葉だけを一卷のなかですつと追ってみると、新島の苦悩というものがわかるような思いがいたします。キリスト教学校というのとキリスト教主義学校とはどう違うのかということも、新しい課題を新島は出しているように思います。教育編をずっと見てそういう点を一つ思いました。

「良心」という言葉

それからもう一つは、新島の手紙のなかには、正門のころの碑にもあるように、「良心」という言葉をよく使っておりまして、その良心という言葉は、新島のうたい文句にもなるわけです。しかも明治二十一年の「大学設立の旨意」のなかにやはり「良心を手腕に運用する」というような言葉が出てまいります。そこでその良心という言葉は Conscience という言葉を新島がどんなふうな契機で理解したのだろうかということ、こんど教育編と宗教編とをあわせて考えてみたことがあります。脱国する前に、新島が漢訳の聖書を読んでいることは確かなんです、アメリカでもホンコンで購入した聖書を座右にしていたと思われます。ただし、新約に限って申しますと、漢訳聖書では「良心」という表現は一、二例しか見当りません。したがって、日本に帰ってきて、英訳のコンシエンスを良心というふう置きかえていったと思われます。その経緯というものに私は非常に興味があります。

新島という人は、さつき高橋先生がおし

やったように歴史的な回顧をしばしばなさっている。そういう歴史的なコンテクストのなかで説教をされたということを言われたけれども、歴史的コンテクストといいますと、どうしても孔子が必要であったり、孟子が必要であったり、あるいは淮南子が必要であったりということになるわけです。そういう点で「良心」というものが新島のなかででき上がっていく経緯というのは、非常に興味深い新しい課題を、実はこの全集を出していくことによって提出したことになると思います。す。なお「良心を手腕に運用する」という言葉は、クロムウエルの言葉にあることは徳富も指摘しております。新島先生の造語でないことは明らかなんですけれども、しかし、良心という言葉を早く国民のなかに定着させる作業というのは非常に大きな意味があったと思います。

北垣 良心というのは、十九世紀のニュー・イングランドのピューリタニズムが非常に強調する言葉です。

杉井 「良」と「心」とを日本語のなかにくつつけるのは明治になってからですね。

島尾 日本人の造語ですか。

杉井 いや、造語とまではまだ研究しておりません。しかし「致良知」なんていうのはある。良知、良能というのはむしろよくあるわけですけれども。

高橋 ギリシア語の新約には良心という言葉はあります。それが日本語に「良心」と訳されたのは何時のことかよくわかりません。英語ではもちろん Conscience になっておったと思います。そこにはいくらかズレがあるかもしれません。

杉井 どちらにしても、日本語で「良心」というふうに着するのとは……

高橋 たとえば大西祝の『良心起源論』（明治三年起稿）とか。

杉井 それより早く、先生のご専門の新約の聖書では「良心」と訳しているのですかね。

高橋 昔の訳はわかりません。漢訳と日本のいちばん初めの訳は、どうなっていたかわかりませんが多分「良心」という訳語は用いられていたと思います。

杉井 良心という言葉は委員会訳の形で、十三年、十四年の段階で出てくるわけです。日本では聖書の和訳が明治六年くらいから行

なわれははじめますね。そして十三年くらいに新約が終わる。そのころに「良心」というのは確定します。その時期に先生がほうぼう回って歩くときに良心という言葉が出てまいります。それはやはり同じ時期ですね。ニュー・イングランドのピューリタニズムであるということとは私もまったく同感で、そのように思いますけれども……新約の場合だけ見ると、新島渡米前の漢訳聖書では、良心という言葉はほとんど使われていない。

高橋 新約には、ギリシア語にあって、英語では Conscience と訳されているのです。新島先生がそこをどういうふうに見られたか。むしろ英語が先に入っているのじゃないかと思います。

島尾 あの時分、日本人の造語がだいぶんありますからね。「科学」は日本人がつくったものです。「化学」は中国人の訳ですね。「哲学」も明治初期の日本人の造語ですからね。だから「良心」がどうなるか……

杉井 決着はいまともかくとしまして、キリスト教云々の言葉からすると、非常に深い配慮のもとでこの私学校は建っているということをつくづく思います。それから良心とい

う問題からすると、それが定着をしはじめた。「道徳」とか「倫理」とかい言葉はあまり使わないで「良心」という言葉を使う。それはいわゆる才能教育ではないということを一生涯で言おうとする新島の骨頂みたいなものだと思います。

島尾 話は飛びますけれども、アメリカ理解についても、漢籍を通じてやっているわけですね。たとえば、日記に、アメリカのどこかの州が浙江省の何分の一と記しています。日本人に浙江省といってもどれ位の大きさかわからないのですが。明らかに『聯邦志略』か何かに出ているものにちがいないと思うんですね。

杉井 ブリッジマンのあれね。

大学構想と募金

河野 いまのお話をうかがいながら思い出したのですけれども、新島が大学をつくらなくちゃいけないんだということの動きを具体的に始めるのが明治十五年ですね。明治八年の開業願には「生徒学業の進歩に応じ、遂にハ大学之域に進ませ度奉存候」という言葉があるのですけれども、それがずっととぎれて

いて、明治十五年になって「同志社大学設立之主意之骨案」その他一連の草稿が書かれるのです。明治八年からこれが書かれるまでの間、その種の資料が残ってないのです。同志社は外国人の寄付をもらって日本人の経営する学校なんだ、というような井明書を書いたり、速成神学科を開設したいとかいふようなことはありますけれども、大学をつくるということが出てくるのは十五年なんです。八年からそれまで空白の感じですね。具体的に動きはじめるのは十六年なんです、その年に中村栄助、横井時雄、松山高吉という三人を社員に加えて、社則四条目をその年の二月に制定するといった具合に学校の体勢もとのえていく、そして大学設立への動きを具体的に展開していくことになるわけですね。

北垣 ところで「大学」という言葉は案外柔軟であつたんじゃないかという気がするのです。と申しますのは、たとえば父親の民治宛に書いている手紙を読んでも、フィリップス・アカデミーにいたときに「フィリップス大学校」という言い方をしていますね。アカデミーにすら「大学」という言葉をアメリカ

で使っています。それをずっと大学とは言い
つづけていせんけれども。われわれはユニ
ヴァーシティを大学と訳しますけれど、初期
の新島は案外それは何でもよかったのじゃな
いかという気がするのです。

島尾 レベルが高い学校という意味ですか
ね。

北垣 そういう意味で……。だからのちに
平気で「明治専門学校」を立案したりするで
しょう。だから、専門学校と大学ですらまだ
あいまいである時期があったのじゃないでし
ょうか。

島尾 フィリップスはかなり大学に近いレ
ベルの中身をもっていたということは、読んで
いる教科書からいえると思います。とい
うのは、アモストで使っている教科書とフ
ィリップスは共通の教科書が多いのです。数
学とか化学とか、それははっきりわかってい
る。だから、それは大学校と言ってもいいく
らいの高いレベルの学校ですね。

ケリー おまけにフィリップスのほうには
セミナリーがありました。神学だけの単科大
学院でした。

島尾 募金によって学校をつくるというア

イデアは、アメリカから影響をうけたのでし
ょうね。大学を設立するための募金というの
は、もちろん目標額があったのでしようね。
杉井 どれほどの経費が必要だということ
を計画していますね。

島尾 ただやみくもに多ければ多いほどよ
いというのじゃなくて。

ケリー 徴兵問題云々というようなことで
五万ドルの基金があれば大丈夫だということ
がこっちのほうによく出てきますよ。それで
アメリカン・ボードが、じゃ五万ドルなんと
かしましようということですね。

河野 それは何年ごろですか。

ケリー 行つて帰つてきてからかな。

河野 二度目の外遊から……。

ケリー これから大学をやらなければなら
ないというときに。

杉井 十六年の十二月に改正徴兵令が出る
んですね。十七年の一月から学生がどんど
いなくなるわけです。そのなかで新島は四月
六日に京都をたつて第二回の欧米旅行に出か
けます。そのときの一つの目的は募金なん
ですね。

北垣 いまのお話は、日本の資料とアメリ

カの資料をつき合わせることの重要性を教え
ますね。

河野 さっきの募金の話ですが、明治専門
学校をつくりたいというときですから、十七
年に活版になった資料ですが、これには目標
額七万円と書かれています。資料に異版があ
りまして、それには十万円と書いてある。二
十一年に出した大学設立の募金額は、たしか
二十万円だったと記憶するのですけれども。

島尾 はっきりそういう目標もあって、そ
れに立ち向う勇氣もあつたし、才能もあつ
た。しかし、誰にでもできることではないで
すね、募金のためにあれだけあつちこつち歩
いたというのはね。

ケリー 一ドル二円というのはいつまで
すか。

杉井 一ドル一円じゃないですか。

河野 それから二円になるのでしょうか。

杉井 二円になるのはだいぶ後でしょう。
二十年代くらいですか。

ケリー ですからちやうどいいのじゃない
ですか。十年代の末くらいで……。そうす
ると五万ドル・イコール十万円なんですね。そ
の五万ドルは五万ドルで、それに似た金をこ

っちでつくったらかというふうになった。

河野 大学設立の募金で集まった額は五万九八七円六八銭九厘、これは明治二十二年十二月、新島が大磯にいるときですね。ただ、申込金額と払込金額は違いますから、これはたぶん申込金額でなくて払込金額だったと思うのです。

脱国は必要だったか？

北垣 実は先日島尾先生ともお話ししていたのですが、同志社で新島襄のことを勉強しておりますと、はじめてアメリカに渡って行って、そしてはじめてアメリカで高等教育を受けて卒業したという、先駆者中の先駆者という印象をうけるわけですが、最近の松井全さんの研究発表を聞いたり、また石附さんの本なんか読んでみますと、幕末になんと多くの人々が海外に出ていたのか、それも薩摩藩や、熊本藩から、あるいは幕府からどんどん派遣されているわけですね。新島襄自身が脱国して上海に行ったときも、上海に停泊中に、ヨーロッパへ派遣された日本の使節団の人たちがいて、そのうちの三人は知っ

ている、その一人はとくによく知っているの
で、みづからないように隠れているというよ
うなことでしたし、アメリカに行きましてか
ら、モンソンでいろんな人に会い、さっき

言いましたようにトロイでも会い、ボストン
でも会い、いろんな所で会っている。それか
ら岩倉使節団の人々のなかにも友人・知人が
あったわけですし、川勝塾でこれだと思う人
はみんな新島よりも早くアメリカや、イギリ
スに行ったりしたわけでした、これは松井さ
んもおっしゃるのですけれども、新島もう
ちよっと待っていたら、脱国しなかったて行
けたはずだ、それをなぜわざわざ脱国したの
かという問題ですね。あの脱国を愛国的な、
死を賭しての大変な行為だというふうに同志
社では教えられてきて、たしかにそのとおり
ですけれども、当時だれがどれだけ留学して
いたかといったことをシラミつぶしに調べは
じめますと、新島の例はまた別の光のもとで
眺めてみる必要があるのじゃないかという気
がするわけです。ケリー先生が言い出された
ことですが、欧米の大学で最初のディグリー
をもらった日本人は新島だという、これを
否定する資料はまだ出てこないのですけれ

ども、あるいはひょっとすると出てくるか
もわからないという気すらするんですけど
ね(笑)。

杉井 脱国に関して、新島の海外の経験に
ついて、当時、講義を聴いている人たちから
すると、長すぎたという印象をもっている人
と、いや、いいという人と実は二つあったの
だろうと思うんですね。その二つのなかで、
よく出て行ったということだけは共通してい
たと思うのです。明治の二十年代の大学設立
のうったえをするときに、ちょうど十年前の
脱国が吉田松陰ですから、一八五三年と六四
年ですから、よく吉田松陰との対比が行なわ
れる。おそらく新島先生にもそういう意識が
あって、その他漂流して帰ってくるのがいる
わけですね。それから藩の命を受けて出る者
もある。一八六五年以降、新島が脱国する翌
年から幕府は公的に許しますから、ある意味
では私的に出る最後なんですね。

島尾 罪悪感はあるしなかったのじゃない
かという感じがするのですけれども。

杉井 ただ、さっき先生おっしゃったよう
に、もうちょっと待ってれば自分も行ける
のは見えていたと思う。それならば、なぜあ



んな大きな冒険をしたのかということが新たな疑問になってくる。おそらく最大の疑問になってくる。このあいだ松井さんの話を聞いてつくづく思いました。もう自分たちが行けるのになぜそんな冒険をしたのか。

河野 上海でベルリン号からワイルド・ローヴァー号に乗り換えるでしょう。新島の日記なんかを見ると、実にあっさり書いてあるわけですね。実際には危険がいっぱい、先のことはどうなるかわからないというような状況だったのではないですか。新島はほとんど何の苦労もなしに乗り換えられたように書いてあるんですが、そんなものじゃなかったでしょう。

北垣 日記を見ると、イギリスの船に乗り組むことになりかけたわけでしょう。ところがそのイギリス人が約束の時間に来てくれなかったわけですね。だから新島は、他人は頼み難しというような感想を書いていますね。本人も多少は努力したのじゃないでしょうか。

ケリー これはゲルストン・ハーディー氏が子供時代に聞いた話だというのだけれど、セイヴォーリー船長が上海に着くと、また間も

なく長崎に行けという命令が出たのですよ。それには新島を積んでいたらまずいから、上海の船をすつとまわるのですよ。だれも引き取ってくれない。最後がワイルド・ローヴァーのテイラー船長だったんですよ。

北垣 セイヴォーリーは日本人の密航を助けたことがばれて会社をクビになるのですね。

ケリー それをゲルストン・ハーディーは子供時代に聞いた。ハーディー家は新島の話はもうもりふくらんでいっているからね。それなかなかい話だからいっぺん原稿にしてくださいと頼んだが、もらえませんでした。

北垣 たいへんおもしろい話がいろいろあるのですが、時間も迫ってまいりましたので、言い残したことがおありでしたら一言ずつおっしゃっていただきたいと思います。

東洋の説教

河野 高橋先生におたずねしたいのですが、新島の「説教編」と同じ時代に、同志社外の牧師さんなどが説教したもので、こういふ本になっているものがあるんですか。

高橋 それは沢山とか植村とか、少しおく

れますけれども内村鑑三の説教とか、それはあります。

河野 新島との違いはありますか。

高橋 それはありますね。

杉井 植村さんの説教集よりは新島さんの説教のほうがずっと東洋的・歴史的言及が多いですね。

高橋 そういう点はね。私は植村の説教はそう詳しくは知りませんけれども。

杉井 弟子である小崎の説教をずっと読んでみますと、小崎の説教はずっと洋語が多くなる。ところが小崎の手控えのほうは新島先生と同じように漢籍がずっと出てくる。さっき高橋先生は、説教は聞かなければだめだとおっしゃいましたが、活字になってから一生懸命読んで、その神学がどうだというのはやはりむづかしい問題だろうと思うのです。新島は説教にまわって、同志社の学生はともかくとして、都市説教が少ないですね。ところが小崎の説教を見ますと、明治十三年、四、五年という時期の説教は、明らかに東京の知識人を相手にしている。ですから、ずっと文明開化的なものを内に蔵している。ところが新島先生のは、高橋先生が解説にお書きのよ

うに文天祥が出てきたり、その他漢籍の言葉にうまくひっかけて説教を展開するというケースが多いですね。

北垣 那須与一から入ったり(笑)。それが三回も四回も出てくる。

高橋 たくさん出ますね。接ぎ木型の説教というのもありますけどね。やはりさっき私の言ったような新島流の特徴がずいぶん現われていきますからね。その時代の人々の説教をいま調べてみたらおもしろいと思いますね。私自身はあまり比較対照しておらないからお答えになりませんけれども。

島尾 幕府の侍で牧師になった人が多いというの、これはどう考えたらいとお考えですか。海老名がそうなんです。明治維新の薩長側でなくて、旧幕臣側の侍でキリスト者になったのが多いということは事実らしいですね。

杉井 そうですね。それは山路愛山が有名な『現代日本教会史論』のなかでうまく言っています。士族としての当然の権利を失って、そして彼らもついていたブルーフのようなものをどんなふうに展開するかといったときに、政治的にはバスに乗りおくれた人た

ちがその召命観のようなものをキリスト教で置き換えていくということを。

イラストの名手

ケーリ まだ全然出てない話ですけど、イラストの筆が立つのですね(笑)。ペンでも上手にかくし、鉛筆でもやりましますし、物によってたのもしいですよ。この座談会にもイラストを一つくらい入れてもいいのじゃないかと思うくらい。ほんとに上手なものです。むこうでキリスト教を落第してしまったら、どこか道端あたりでイラストの、アルバイトでけっこうめしも食っていったのじゃないかな(笑)。

島尾 アーモスト時代の教科書に先生の似顔絵をだいたい書いていますよ。おそらく授業中やっていたんじゃないかと思う。

ケーリ あるいはこの先生はこういう人だったということを後でかいていたのかもわからないです。

河野 スケッチはものすごく緻密にかいてあるんですね。ところが、その脇につけられている文字はどうかというと、文字はかなり乱雑なんです。

島尾 誤字が多い。

河野 誤字もあるし。和文の場合は、絵も文章も英文の日記ほどには緻密ではない。英文の資料のスケッチは、時間をかけて描いていますね。

杉井 宗教編の説教のなかに絵を四つでしか入れましたね。説教の草稿をたとえば小崎の場合なんかもずっと見る機会があつて見たわけですけれども、新島先生の場合は説教の草稿に絵があるんですね。例えば教会は、岩石の上に兀立する灯台の如くなるべしとして、磐の屹立する絵をかき、ヨセフの生涯を述べて、重畳する山脈で示すなど。琵琶湖のあれはカットしたから。

河野 意味がわからなかった。

杉井 建物の窓からメラメラと火炎の立ちあがっている絵は、消防手が五階にいる娘を救い出すことを示すもので一身を犠牲にする行為の説明の絵なんです。

河野 新島は頭での観念的な操作よりは、図形によって物を考えるほうが向いていたのじゃないでしょうか。

北垣 英文の書簡の一部を読んでいますと、チャタムへ行きましてテイラー船長の家

で夏休みを過ごしながらラテン語を一生懸命勉強しているのですね。ところが新島のラテン語というのは物にならなかった一つですね。だからB・Aはもらえなかったらしいですけれども、新島においてついに成功しなかった面もあったということは、おもしろいと思いますね。必ずしもすべての点において新島の才能は開花したわけではなかった。

きようはいろんなことをお話しいただきましてありがとうございます。『新島襄全集』のいい意味での予告にもなったかと思ひますし、また反省をこめて、全集が全部出ましたあかつきには、改めて新島襄という存在が正しく見直され、学び直されるということを期待したいと思ひます。

お忙しいところを長時間ありがとうございます。これで終わらせていただきます。

（一九八三年七月十二日収録、於同志社有終館第二会議室）

D・W・ラーネッド『回想録』刊行について

D・W・ラーネッド先生は、アメリカカン・ボードの教育宣教師として来日、新島先生、J・D・デビス先生と共に、開校直後から半世紀以上も同志社の教育に貢献されました。その間、同志社大学の初代学長を兼務され、神学・経済学・政治学等の学界にも顕著な業績をのこされました。

今年は、先生のご永眠四十周年にあたり、遺徳をしのぶ事業として、先生が同志社を引退されて帰国されるとき、当時の『同志社新聞』に寄せられた「回想録」等を復刻しました。

回想録D・W・ラーネッド

ラーネッド先生の「回想録」によせて

……上野直蔵

同志社創立回顧

予が七十年の生涯

ラルネッド回想録

三つの自由を……訳・大塚節治

訣別の辞

編注・解説

ラーネッド先生略年譜

発行者・学校法人同志社

取扱い・同志社収益事業課

頒価 三〇〇円